医療法人社団鴻愛会 こうのす共生病院

Social Goodプロジェクト

# 年次報告書 2025

## 2025 Annual Report

## はじめに

Introduction

理事長 神成 文裕

# 医療と介護の壁を壊し、人とヒトをつなぎ、共に生きる地域をつくる

平素より医療法人鴻愛会の活動に多大なるご理解とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。
私たちは「共に生きる」という理念のもと、医療と介護の壁をなくし、シームレスに連携することで、ご本人やご家族の「想い」にまで応えられる存在でありたいと願い、日々事業を運営してまいりました。

一方で、日々の現場で直面しているのは、「病気を治す」だけでは解決できない「孤立」という深刻な課題です。人はつながりの中で生きており、そのつながりこそが心身の健康を支える土台となります。

そこで私たちは、「病院は病気を治す場所」というこれまでの枠組みを広げ、「人と人をつなぎ、街を元気にする拠点」へと進化する決意のもと、2025年2月、クラウドファンディングに挑戦いたしました。多くの皆さまから寄せられた温かいご支援は、私たちの大きな推進力となりました。本レポートでご報告する通り、皆さまからお預かりした想いは、日々の実践を積み重ねるための体制へと変わり、相互扶助の輪が少しずつ、地域に根付き始めていると実感しております。

日頃より地域で連携させていただいている皆さまに、私たちが目指す未来と足元の実践について、より一層のご理解と共感をいただけましたら幸いです。
誰もが「この街で生きていて よかった」と心から安心できる未来を目指して。私たちはこれからも、皆さまと共に歩み続けてまいります。

# 目次

Contents


はじめに 2

医療法人 鴻愛会の理念・ビジョン 4

Social Goodプロジェクトの目指す未来 5

Social Goodプロジェクトのロジックモデル 6

初期アウトカム KPI 7

これまでの主な歩み 8

実践内容 9

01. 地域のつながりを循環させる

井戸端会議 10

こうのすえん 12

おせっかい議 14

02. 共に生きる地域医療モデルの社会実装

MEET＋（ミータス） 16

おせっかいリハ 18

病棟コミナス 20

退院後支援 22

ご支援の御礼と今後 24

## 医療法人 鴻愛会の理念・ビジョン

Philosophy and Vision

# 「共に生きる」地域共生社会の実現

医療法人社団 鴻愛会は「共に生きる」を基本理念に、超高齢化社会における地域包括ケアの中心となるべく地域の医療と介護を支えてまいります。
地域の皆さまが安心して健康な毎日を送れるように。

*Live together.*

共に生きる

### 1. 地域包括ケアシステムの構築

私たちは、地域の医療機関・介護施設と緊密な連携をとり、他地域の模範となる地域包括ケアシステムを構築します。

### 2. 信頼される医療サービス

私たちは、地域密着型の急性期病院として地域に信頼される医療サービスを提供します。

### 3. 想いに寄り添う医療・介護

私たちは、患者様と御家族の声に耳を傾け、想いに寄り添った医療・介護サービスを提供します。

### 4. チームの力

私たちは、全職員が患者様を中心とするチームとして協力することで、安心してサービスを受けることが出来る環境を提供します。

### 5. 弛まぬ努力

私たちは、目標とするサービスを提供し続けるために自己研鑽し、日々の業務改善と健全な運営に努めます。

Social Goodプロジェクトの目指す未来

Our Future

# 「この街で生きていて よかった」と
# 心と体の安心が自然にめぐる地域共生社会の実現

私たちが目指す「街を元気にする拠点」への進化。
その具体的な道筋の起点となったのが、株式会社CNC（島根県雲南市）が提唱する『コミュニティナース（以下、コミナス）』の概念への共感と、それに基づく『おせっかい』の実践です。
それは、役割や立場の枠組みを越え、自ら手を差し伸べることからすべては始まります。私たちが持つ医療の知見や場といった資本を地域へひらき、日常的な関わりを重ねていく。そうした地道な活動を通じて、足元では人と人との繋がりが増幅し、健康に対する意識の向上や、新たな共創が生まれています。
この小さな変化の連鎖が、社会的孤立を解きほぐし、暮らしへの信頼や安心感へと着実に育っていくと考えます。

こうした繋がりは、やがて地域全体を支える力へと変わります。
大切なのは、患者さん含む住民の方々が、それぞれ元々持っている、“好き”や“得意”を活かして地域で役割を持つ可能性です。お互いが助け合う「相互扶助の文化」が定着することで、限られた医療資源は最適化され、真に必要なケアが無理なく行き届くようになります。
誰もが心身の健康を守られ、主体的に生きることができる。
その先にある、安心が自律的にめぐる地域の未来へ。

本レポートでは、この道筋に沿って生み出された足元の変化をお伝えします。

## Social Goodプロジェクトのロジックモデル

Logic Model

## 初期アウトカム KPI

Initial Outcome KPI

### ❶つながりの増幅

| 出会った住民さんの数 | 院外の<br>おせっかい協力者さん・団体数 |
|---|---|
| 3,142人 | 86人 |

### ❷心身社会的健康に対する意識の向上

| WPを引き出した数 | WPの実現数 |
|---|---|
| 150件 | 88件 |

### ❸医療・介護・地域間のアクセス向上 ❹地域内共創の増加

| 起こしたイベント数 | あいのりイベント数 |
|---|---|
| 36件 | 25件 |

※2024年6月～2026年2月末地点の累積数値

※❶：延べ人数

※WP：住民の方の興味、好きを起点とした願い「ウェルビーイングプラン」

これまでの主な歩み

Our Journey

# 実践の認知〜共感の循環により、広がりつつある つながりの輪

**2021年12月〜2022年2月**

駅前モールに約3か月
コミナスブース
設置 @アズ熊谷

**2024年7月**

PJメンバー募集開始
・30名のコミナス研修
・業務内として月8Hの運用開始

**2025年2月**

クラウドファンディング開始

**2025年10月**

コミナスモデル推進室 発足
- コミナス専従メンバー4名ジョイン

**2025年11月**

GOOD おせっかいAWARD2025※
推しおせっかい10選
「変化の兆し発見賞」受賞

**2026年3月**

- クラファンご支援者様向け
  『コミナス見学会』開催
- 『Annual Report 2025』公開

※株式会社CNC主催 全国の地域で活動するコミュニティナースの活動を相手の本当の願いに寄り添った行動を讃え表彰する祭典

## 実践内容

Our Practice

01. 地域のつながりを循環させる

井戸端会議
こうのすえん
おせっかい議

02. 共に生きる地域医療モデルの社会実装

MEET＋（ミータス）
おせっかいリハ
病棟コミナス
退院後支援

# 井戸端会議

# 誰もが安心して集い
# “つながり”を実感できる病院内の居場所

## 着目した可能性

誰とも話さない一日が続くと、心も体も、そして病院への距離までもが少しずつ固まってしまいます。家で一人で過ごす方々が、少しでも誰かとふれあい、お話をしたり聞いたりできる「場」の可能性に着目しました。
そこでつぶやかれる「昔、ウェディングドレスを編んだの」「本当は庭いじりが大好きで」といった言葉は、その方が本来持っている、生きるエネルギーのひとつです。一人ひとりのエネルギーを発見したり、分かち合ったり、ただ そこにいるだけで繋がりを感じられる。
そんな居場所として、病院をひらいていきたいと考えました。

実践内容

Our Practice

# 井戸端会議

## やったこと / やっていること

### 心地よさを守る「最低ルール」の策定

「否定しない」「いるだけもよい」といったルールを共有。誰もが安心して自分らしくいられる心の安全地帯が大事という心構えを前置きに。

### 参加者の「すき・特技」を共有する

すきや特技を起点にテーマを設定。編み物・お絵描き・レジン・自作の紙芝居披露等。自らのすきや特技が、他の人のうれしいや楽しいにつながっていく実感へ。

### 専門職からひとりの人として、ひらくお話会

病院職員に関心を寄せてくださる会話から、薬剤師・看護師等、病院職員の紹介や裏側の仕事についてのお話会を実施。医療枠内の関係性では見えない、日常やその人自身に触れることで、病院職員がひとりの人として距離が近くなる時間に。

## 生み出されたもの｜声・エピソード

「いつもはテレビを見ているだけの毎日だけど、ここに来るといろいろな人とおしゃべりできてうれしい」「ひとり暮らしで、気づくと誰とも話さない日もある。多くの方と話せてありがたい」そんな声と共に、回を重ねるごと、独自の温かな空気が流れ始めています。

常連の方も、初めての方も、共有してきた時間は違えど、それぞれ自分が心地よいと感じるところを探せる空気感。例えば、お菓子を差し入れる人、創作物をプレゼントする人、初参加の車いす患者さんの手を握って声をかける、それを見守る人など、それぞれのカタチでこの場にいる誰かのために何か貢献したいという想いが自然に集まっています。

一方で、初対面同士で気が合わず、少し不穏な空気が流れそうな場面もありました。でも、周囲が過剰に反応せず、否定もせず、そっと見守りつつも適切に介入する。心地よさを守るためのルールも共有しながら、そんな心がけや姿勢が、場を健やかに保つ自助的な働きとして機能しつつあると捉えています。

### これから、実践のあり方はどうなる？ by 実践 Owner

まず第一は自分達自身が楽しむこと。一定期間継続してきたからこそ、場の維持という難しさも実感していますが、「ここに来て話し始めたら、止まらないの」という参加者の弾んだ声を聞けることが、何よりの喜びです。心地よい場の空気を土台に、今後は参加者の「人生を聴くお話会」や、多様な「病院職員からのお話会」などもトライしながら、対話を通じたつながりの実感を共にゆっくりと重ねていきたいです。

## こうのすえん

# 病院のとなりの畑で
# 社会とつながる “縁” と “居場所” を耕す

### 着目した可能性

きっかけは、病院の隣にある畑を綺麗にできないかな。というおせっかい精神からでした。施設入所中のご主人の想いが詰まった大切な畑。いまは荒れてしまったその場所を蘇らせることは、日々の生活に寄り添った「見守り」を実現するだけでなく、コロナ禍もあり遮られてしまった家族の縁を、紡ぎ直すことでもありました。
実践を通じてその輪は広がり、畑の持つ受容力が、地域の不登校や引きこもりの方々が自分らしい役割を見つけられる居場所となっています。見守りのひとつとして始まった一画が、医療の枠を超え、社会とつながる 縁を生み出し、新たなセーフティネットとして機能し始めています。

# こうのすえん

## やったこと / やっていること

### 想いを拾い、見守りと再会の実現 / GOODおせっかいAWARD2025 受賞

施設入所中のご主人が大切にしていた荒れ畑を再生。この実践により日常的な見守りへの繋がりと、ご主人の外出支援が実現。思い出の畑でご家族が久々に再会し、温かな団らんの時間に。本実践は、CNC主催の全国コミナス活動を表彰する祭典『GOODおせっかいAWARD2025』で「変化の兆し発見賞」を受賞。

### 多世代が集い交流する場の創出

収穫祭などは、子どもたちからご高齢の方まで、地域の多様な世代が集う交流の機会に。共に土に触れ、収穫の喜びを分かち合う体験が参加者同士の新たな会話や繋がりを生んでいます。

### 畑の中での役割と居場所

地域の不登校や引きこもりの方々が参加し、自然に社会との繋がりを取り戻しています。「一緒に土に触れ、野菜を育てる」という畑の中の役割を持つことで、自分らしく主体的にいられる、安心の居場所として機能し始めています。

## 生み出されたもの｜声・エピソード

畑の再生、収穫祭を経て、施設入所中のご主人が外出支援を利用して蘇った畑を訪れ、ご家族と久々の温かな団らんの時間を過ごせたことは、実践が生んだ大きな一歩でした。
収穫祭に参加した地域の方からは「収穫の喜びと人とのつながりを感じ、人生の一頁に記憶したい」「子どもたちを見ているだけで生きている喜びを感じた」と心揺さぶられるお手紙も届きました。

さらに、地域の不登校や引きこもりの方へと輪は広がり、当院に通うお母さまは院内のチラシを見たことを機に、引きこもりがちだった息子さんと親子で参加するように。見知らぬ場所へ参加するという壁を越えられたのは、お母さまの「畑が好き」という気持ちから息子さんも「やってみよう、外出する機会をつくってみよう」という思いの重なりです。“やりたい”や“好き”を起点に、前向きな行動への変化と連鎖が起き、自分らしくいられる安心の居場所になりつつあります。

### これから、実践のあり方はどうなる？ by 実践 Owner

多世代の交流の場として、また土に触れ命を学ぶ食育の場として、この畑を大切に育てていきたいと考えています。 さらに医療・介護の枠をひらき、例えば、患者さんが不整地を歩く「リハビリの場のひとつ」として活用できたらとも構想しています。
そして、収穫野菜がまた地域に還元されながら、より多くの方にこの場を知ってもらうことで、安心がめぐる循環を広げていきたいです。

# おせっかい議

## おせっかい がつなぐ、相互扶助と地域資源。
## 「この地域だからよりよく生きられるね」の実感を。

### 着目した可能性

当院地区にお住まいの方々の声に耳を傾けると「近くの独居高齢者世帯が心配だ」「以前はあった近隣との交流機会がなくなり、お互いの顔が見えなくなりつつある」といった声がありました。住宅地内の高齢化や世帯の入れ替わりが進む中で、地域のつながりや資源が埋もれやすくなっている状況でした。 そこで私たちは、住民さんの「つぶやき」を起点とする対話の場『おせっかい議』を、人と地域資源をつなぐエコシステムのエンジンとして位置づけました。誰かのつぶやきをきっかけに、住民同士が対話し、互いにおせっかいを焼き合い、何かが生み出される。
こうした相互扶助の関係性と、地域に備わっているヒト・モノ・知恵・場所といった資源を再発見し、機能させることで、「この地域だから、よりよく生きられるね」と実感できる未来に可能性を見出しています。

# おせっかい議

## やったこと / やっていること

### 地域にある拠点、カフェでの会議開催

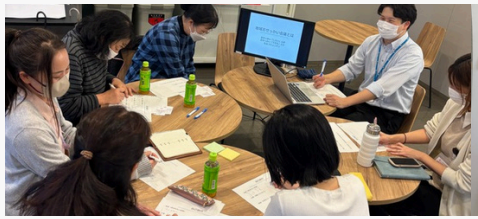
住民の方が日常的に利用するカフェで開催。オーナーさんに協力をもらい、リラックスしたカフェの雰囲気の中で、好きなこと、リアルな困りごとやモヤモヤを共有し、共に考える場に。

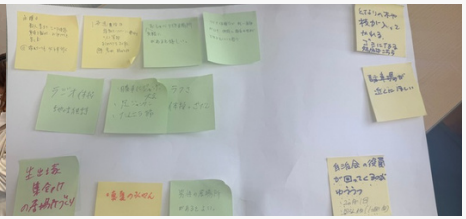
### 自己開示と相手をよく知り、おせっかいマインドの普及

好きなことや昔話を共有する自己紹介の時間を設け、お互いの人となりを深く知ることから。おせっかいによる地域の可能性を共有し、自然とつながる土台を目指しています。

### 想いと地域資源をつなぎ、新たなつながりの場へ

地域カフェオーナーさんの「販路を開拓したい」つぶやき・想いと、徒歩数分の当院売店エリアという資源を掛け合わせ、院内での出張販売を実現。待ち時間の外来患者さんやご家族、職員との間に会話や関係性が生まれ、新たな地域の輪のカタチとなっています。





## 生み出されたもの｜声・エピソード

「おせっかい議」3回の実践を経て、病院での開催から、地域にある憩いの場所 カフェへの開催となりました。地域のお困りごとや、実はやってみたいこと、すきだったことをきっかけに、おしゃべりとつぶやきが交互に展開されながら、たのしく、対話の場を生み出す地域の方の心構えと空気感が循環しはじめています。

前回は、数百メートル以内のご近所さんだけど初対面の方や、同じ県出身の人が数名いたことから、地元名物知ってるクイズへと発展し、距離感も一気に近くへ。「一人暮らしで会話機会がなく、もっとおしゃべりの場所がほしい」「やっぱり、身体を少しでも動かすと、心が軽くなる。ふらっと気軽に、ノリでいける機会があったらいいね」といった、つぶやきがありました 。そこで、おせっかい案件として、決定したことは、軽運動とおしゃべりがバランスされた「気軽な居場所、集会所にどうぞ」。軽運動は、体操や足じゃんけん、こうのす音頭などのアイデアが出て、体操の先生も参加しながら、次回具体的なコンテンツと実行の役割分担を決めていきます。

### これから、実践のあり方はどうなる？ by 実践 Owner

生出塚エリア内にある拠点の活用と、おせっかいコーディネーターのような役割を担ってくださる住民の方々を起点に、トリニティで相互扶助な関係性によって心地よさが自然とめぐる地区文化を目指し、多様なつぶやきによるおせっかいの実装を共に実現していきたいです。 他のエリアへの展開も見据えながら、自分が住む地域や人の可能性を探求し「よりよく生きる」ための土壌を少しでも耕していくことができたら、最高です！

# MEET+（ミータス）

# 街の中で、心身健康づくりの場を届ける

## 着目した可能性

重症化してから搬送される方々と向き合うたび、もどかしい思いを抱えてきました。病気になってから、来るのを待つだけでは、本当にサポートが必要な、病院に足を運べない方々には手が届きません。「病院職員として、もっと手前の日常でできることはないか？」という問いが、MEET+（ミータス）の原点です。
病院の機能をひらき、届けることに着目し、何かのついでに何気なく健康に触れる機会を街中に実装すること。街の各所でつながれる医療や健康へのタネをつくりたいと考えました。

## 実践内容

Our Practice

# MEET＋（ミータス）

### やったこと / やっていること

**多様な実践拠点の展開**

駅ビル、介護施設、ショッピングモール、地域イベントなど、住民が自然に集まる場所へ積極的に出店。

**専門職による街角健康相談と健康づくり雑談**

内服薬の疑問や帯状疱疹ワクチン等の相談や健康テーマに雑談。日常動線の中での「予防医療」の啓発を実践。

**体験から育む、医療への好奇心と未来の健康**

「お薬調剤体験」の子どもたちの参加で、医療・健康への関心を育み、「高齢者疑似体験」では若い世代が加齢を自分ごと化するきっかけを。多世代が楽しみながら、医療に触れる機会を街に実装し、未来の健康を支える好奇心の芽を育てています。

### 生み出されたもの｜声・エピソード

ショッピングモールや地域イベントで「医療＆介護なんでも相談室」として、専門職が気軽に雑談をしながら、健康相談ができる機会では「病院は怖いけど、ここなら話しやすい」や「ここに来たら誰かいるから、安心するわ」と、医療や介護の専門職が街の中にいること自体を、心の拠り所として捉えてくださる声も寄せられました。

また、子ども向けの「こども薬剤師体験」などの体験型コンテンツを通じ、多世代が医療に触れるきっかけをつくっています。白衣を着てお菓子を薬に見立てて調剤する子供たちの誇らしげな姿は、調剤がどのような仕組みでされてるのか？を理解しながら、家族にとってのたのしい時間になると共に、医療を身近に感じる機会になっていると捉えています。

活動を継続する中で、地域の方の積極性にも変化が現れました。「今日は血圧低いかな？」と自身の体調をクイズのように面白がる方や、「あそこに行けば、看護師さんがいて話を聞いてくれるよ」と地域の方同士でミータスの場を教え合う光景も生まれ始めています。

### これから、実践のあり方はどうなる？ by 実践 Owner

MEET＋は、「体調に不安がある方が行くところ」という概念を覆し街中で気軽に身体の話ができる場所を目指して活動しています。健康相談だけとは限らず、家族や食べ物の話などおしゃべり場として立ち寄っていただいた方が少しでも楽しいと感じて帰っていただくことができれば、身体だけではなく心の健康にも役立てると感じています。この活動を継続することで、こうのす共生病院の認知度が増し、地域包括ケアシステムの構築に役立てば幸いです。

## おせっかいリハ

# その人が持つ可能性を最大化し、
# 心身の回復と、社会とつながり続ける力へ

### 着目した可能性

リハビリテーションは、病院での治療から、可能な限り普段の生活へと戻っていくための境界線上にあります。リハビリの過程でご本人の「できる・やりたい」というつぶやきを起点とし、その方が本来持っている知恵や技術を組み合わせ、その時々の状態における可能性を最大化することを目指しています。
目標を掲げることや、他の利用者さんと共に過ごす時間は、境界線を乗り越える力となり、自分の行動が誰かの役に立っているという実感は、心身の回復を促し、社会とつながりつづけるための「貢献寿命※」の伸長につながる力になると考えています。

※東京大学の秋山弘子名誉教授が提唱する、高齢者が社会とつながりを持ち、役割を担い、誰かの役に立ち感謝される生活を送り続けられる期間のこと

# おせっかいリハ

## やったこと / やっていること

### 支援する側・される側の役割をひらく

編み物ができる・やりたい利用者さまが多いことに対し、職員が一緒にできる知識がない という状況から、編み物が得意な利用者さんが「教える側」となる講座等を開催。リハビリ中の支援する・される役割をひらいて、支援の境界線を更新しています。誰かの知恵が他の誰かの知恵につながり、誰かの願いを叶える糧となる循環をつくっています。

### 「願い」が表現された作品を地域の場へ

利用者さんの願いがカタチとして表現された絵画・編み物・詩作等の作品を地域の公民館で開催する展示会へ出展。病院のリハビリステーション内での展示から地域の展示となることで、より多くの人の目に触れ、社会との確かなつながりを実感する機会に。

## 生み出されたもの｜声・エピソード

きっかけは、通所リハビリを利用されているFさんの「社会に貢献したい、誰かとつながりたい」という願いでした。元大学教授として長年、教えることに情熱を注いでこられたFさん。その想いを起点に、リハビリテーション科の新人スタッフを対象とした「接遇研修」の講師としてこれまでに2回の講演会を実現。Fさんの状況に合わせ、職員が二人三脚で構成を考えながら、利用者という当事者の目線から、現場での感動や葛藤を真摯な言葉で伝えてくださいました。
それは、新人職員たちが「相手の目線に立つ」という接遇の本質を学ぶ、貴重な機会となりました。
ご家族からは「イキイキしている」との声が届き、ご本人からも「気持ちよかった」という言葉をいただきました。Fさんが本来持っている「教える力」が、新人たちの未来のケアの土台へとなり、誰かとつながりたい願いにつながる時間になったと捉えています。

## これから、実践のあり方はどうなる？ by 実践 Owner

今後は、利用者さんの願いが表現された作品のその先、地域イベントでの展開など「自分の作ったものが誰かに届く」喜びを増やしたいと考えています。社会からの反応が、回復の原動力になると考えるからです。そして、そのために利用者さまの想いを大切にし、共に心地よい「おせっかい」を焼ける仲間を増やしていきたい。貢献できたという利用者さんの体験の総量を、できる範囲の中で、けど、しっかりと増やしていけたらと思っています。

# 病棟コミナス

## 当たり前を変え、ケアの専門性をひらく。
## 入院生活にプラスαの彩りを、病棟に新しい文化を。

### 着目した可能性

入院生活とは「我慢しなければならないもの」というこれまでの当たり前を変えていきたい。
そのために必要なのは、患者さんが、うれしい・楽しいと感じられる生活の彩りと、共に歩む看護師やリハビリ職の方々が、それぞれの専門性を最大化できる環境の両立であると考えます。しかし、多忙を極める業務の中で、専門職が抱く「もっと寄り添いたい」という純粋な願いが叶いづらい現状があります。
そこで、患者さんの生活に彩りの種をまく「おせっかい」を焼くことと、それにより専門職の方々が本来のケアに専念できる時間と心の余白をつくる可能性に着目しました。患者さんの笑顔が増え、その姿でケアする人の専門性がひらかれていく。心地よい循環が生まれる、あたらしい病棟文化を目指しています。

# 病棟コミナス

## やったこと / やっていること

### 入院生活のプラスαの彩りが、離床の質向上へ

「共有スペースへ出て、ただ座る」から「なんか楽しそうな所に出て、参加する」へ。病棟内の共有スペースで、日々の傾聴やお絵描き、風船バレー、折り紙、編み物、季節の行事を通じ、個人のすきや想いを起点としながら、自然に病室から出ることが楽しみにつながるコンテンツを日常に組み込んでいます。

### あたらしい病棟文化をつくっていく

患者さんが自発的に共有スペースへ足を運び、笑顔が増えたり、ケアする専門職の方と患者さんについてのお話を共有したりする。その積み重ねにより、患者さんが、楽しく よりよい入院生活を過ごすため、専門職とコミナスが互いの役割を認識し、リスペクトし合い、両軸から支える状態を目指して実践しています。

## 生み出されたもの｜声・エピソード

車椅子の方も、歩行できる方も、認知症の方も。誰もが等しく日常の楽しみを共有できる「風船バレー」は、共有スペースを彩るコンテンツの一つです。風船が天井や遠くへ飛んでいかないよう紐をつける工夫を施し、誰もが安心して夢中になれる遊びの場となっています。
認知症を患うHさんへの関わりも、変化を観察しました。じっくりとお話を伺い、得意な折り紙を教わったり、車椅子で共に病棟内を散歩したり。以前は落ち着きがなく、どこかへ行こうとする行動が顕著でしたが、コミナスの活動を共にする日は、椅子に座って何かに没頭する穏やかな時間を取り戻されています。

この活動は、専門職の方々が事務作業に専念したいお昼過ぎの時間帯をメインに活動しています。帰り際に患者さんから「また明日も来てね」「もう帰っちゃうの？」と名残惜しそうに声をかけていただくことや、看護師から「活動後は認知症の症状がクリアになっているようだ」とフィードバックをいただくことも増えています。こうした日々の積み重ねにより、病棟内で新しい相互扶助関係を育んでいます。

### これから、実践のあり方はどうなる？ by 実践 Owner

患者さんのうれしい・楽しいの種をつくる、分かち合うことを大切にするマインドが病棟にいるすべての人に表出していることを目指しています。結果として、患者さんの認知機能の維持・向上や、入院生活が「楽しい」となる当たり前が生み出されると考えています。専門職の方々との対話による実践へのフィードバックもかけながら、病棟内の関係性をつむいでいきたいです。

# 退院後支援

## 病院のひと から 地域のひと として
## 関係をつないでいく、“おせっかい” な 伴走

### 着目した可能性

退院直後の生活不安や孤独は、再入院を招く大きな要因です。私たちは、病棟で築いた「顔なじみ」の信頼関係をそのまま地域へ持ち出すことで、医療・介護サービスだけではカバーしきれない、心の安心感を担保できる可能性に着目しました。
病院職員が退院後も気にかけてくれる、必要に応じて、誰かやどこかをつないでくれる。横串で、「なんかわかってくれているね」的な人として、抜けおちがちな患者さんの心のモヤモヤを拾いながら。病棟コミナスで築いてきた信頼関係をつなぎながら、病院を「病気を治して終わり」の場所から、退院後の暮らしを見守り続ける「地域のハブ」へと更新していきます。

# 退院後支援

## やったこと / やっていること

### 「退院後の不安」への傾聴と適切介入

独居で入院された患者さんに対し、入院中からご家族を含めたご事情や退院後の不安を傾聴。担当ケアマネージャーさんとの対話や退院後、家での生活が問題なく送れるか、家の調査や買い物をするスーパーへ同行し、生活動線の検証を行うことで、退院直後の社会とのつながりを共に回復していきました。

### リハビリへの心理的障壁の緩和

退院後のリハビリ通院の心理的な壁に対し、定期的にコミナスが通院前後に様子を見に行ったり、伴走することで、入院中のリハビリを生活の力へと着実に変換する上でのサポートを実践。地域での自立した生活へと繋いでいます。

## 生み出されたもの｜声・エピソード

退院後の生活に不安を抱えていた独居のOさん。入院中から、病棟看護師と連携し、関係性を築きながら、ご家族のことや、現状の生活背景を伺っていきました。
無事退院後、現状の身体の状態にあった自宅の整備をする上で、ご自宅での家具や整理を共にしたり、普段買い物するショッピングモールで、リハビリ中の身体でエスカレーターに無事乗れるか同行したり。途切れていた民生委員のお弁当配達や見守りも再開されました。

「こんなに支えてもらったから、元気にならなくちゃ」——
自宅訪問時、頑張り屋であるOさんの口からこぼれた言葉です。定期的に、通院前後に、様子を伺ったり、他のコミナス実践の居場所へ共に行ったり、より地域との関係性をつなぎ、地域で自律的な孤立なき生活が送れるよう、伴走をしています。
現場の看護師から「専門職だけでは困難な地域資源の発掘は、今後の支援に活きる極めて有益な情報」とフィードバックをもらいながら、実践しています。

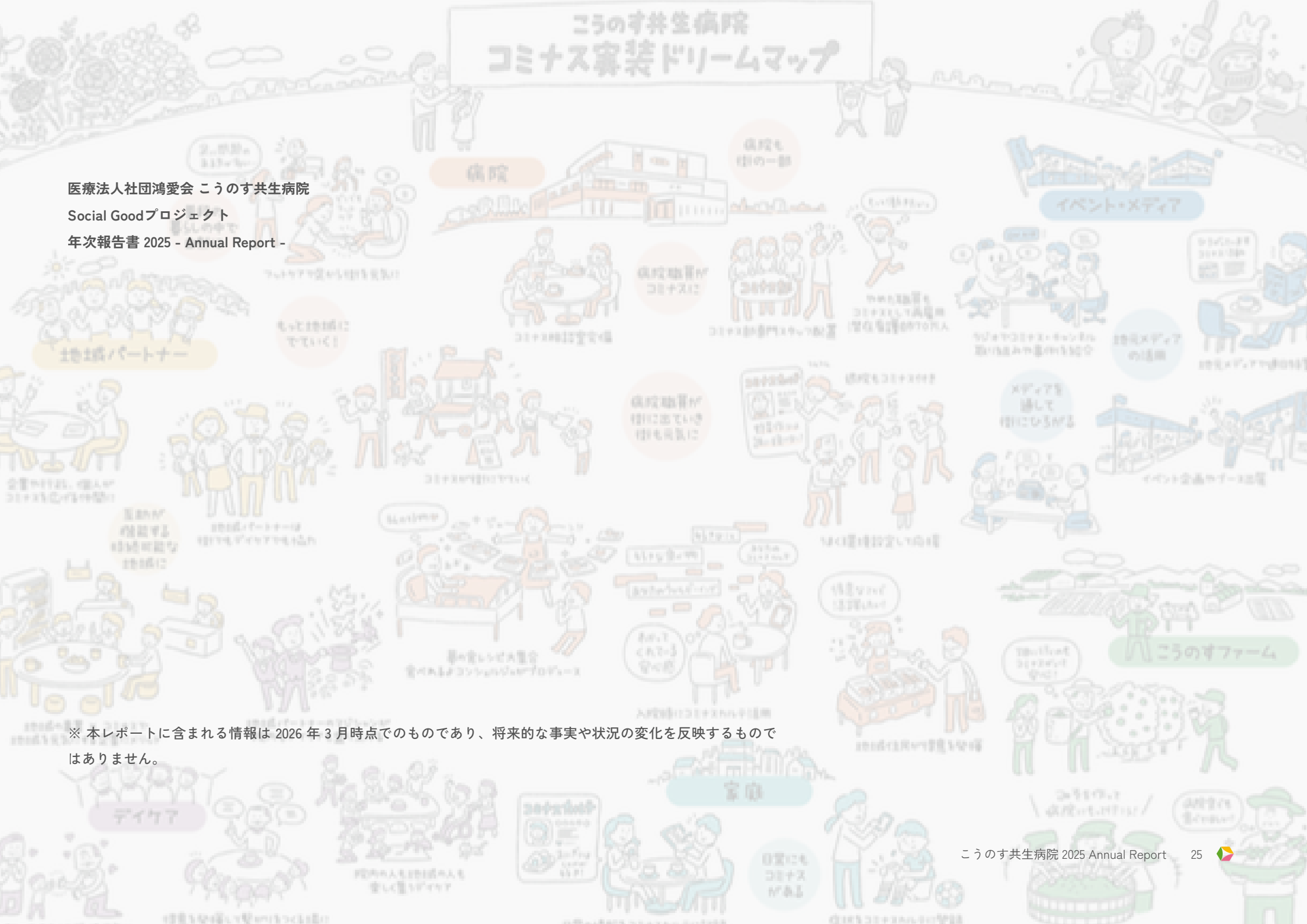
### これまでとこれから by 実践オーナー

病棟で築いた「顔なじみ」の関係をそのまま地域へつなぎ、必要に応じて人や場所を結びながら、患者さんが孤立せず、自分らしい生活を取り戻していく過程を支えていきたいと考えています。制度だけでは拾いきれない心の揺らぎに寄り添う“おせっかい”な伴走を続けていくこと。その積み重ねによって、病院が「治して終わり」の場所ではなく、退院後の暮らしまで見守り支える地域のハブとなる未来を目指しています。

## ご支援の御礼と今後

2025年2月に開始しました本プロジェクトへのクラウドファンディングを通じて、多くの皆さまから温かい応援と資金をご支援いただき、心より深く御礼申し上げます。その後、実践体制は大きく前進しました。おかげさまで、計4名のコミナス専従職員（週64時間稼働）が日々実践を重ねています。さらに、法人内でも約25名のメンバー体制から、次なる公募も予定しています。
今後、予定している実践のひとつとして、2026年 夏頃に新たな交流の場『ふるまい市』の開催を予定しています。
「まちの“やりたい”を、みんなでやってみる！」
「ふるまい、ふるまわれる“つながりの循環”を生む！」
これらを目的とし、住民の皆さま一人ひとりが主役となって「できること」「好きなこと」を持ち寄り、温かな相互扶助の関係性が目に見える形で現れる場を目指します。

「この街で生きていてよかった」と誰もが心身の安心を感じられる地域共生社会へ。
私たちの実践はこれからも続きます。引き続き、共に歩んでいただけますと幸いです。




医療法人社団鴻愛会 こうのす共生病院

Social Goodプロジェクト

年次報告書 2025 - Annual Report -

※ 本レポートに含まれる情報は 2026 年 3 月時点でのものであり、将来的な事実や状況の変化を反映するものではありません。